

小学校 学校教育の部 (9)

授業研究のさかんな学校を目指して

奈良市立六条小学校 教諭 吉村 泰典

1 実践内容

私は、教員は授業が命であると考えている。授業は学級経営の要であり、日々の生徒指導は授業の中で行われると考えるからである。そこで、授業の力量を高めることが教員の資質向上のために重要であると考え、これまで授業研究・授業実践に取り組んできた。

授業力向上のためには、教員自身が学ぶ姿勢と新たなことに挑戦する意欲を忘れてはならない。具体的には、様々な研究会に参加したり、実践者に出会ったりして授業実践や授業理論を学ぶ（インプット）ことと、それらを参考にして目の前の子どもたちの実態に応じた教授方法を考えて授業実践を行う（アウトプット）ことの両輪が必要であると考えている。また、それらを自身の内にとどめるのではなく、同僚をはじめ他の教員も巻き込んで、学校全体で授業力を磨く雰囲気を作りたいと願い、本校で7年間様々な実践を行ってきた。下記の(1)～(3)は、その一部である。

(1) 研究会への参加

教員としての力量を高めることを目指して様々な研究会が行われている。そのような研究会に参加する際に、自分一人ではなく、なるべく同僚に声をかけて一緒に参加するよう心掛けてきた。その中で、講師として話してくださった他校の先生の授業を、同僚とともに実際に見せていただいたり、研究会で学んだことを自分なりに解釈して授業実践を行ったりし、校外で学んだことを校内に広げられるように試みてきた。また研究会で発表の場を頂き、自分自身の授業づくりの考えについて発信することができ、たくさんの先生方とともに授業研究について考えるよい機会となった。

(2) 積極的な授業公開

授業力を磨くためには、インプットだけではなく、アウトプットが重要である。本校では一人一公開を目指して活発な授業研究が行われている。その際、ただ授業を公開するだけではなく、自分なりのテーマ（＝提案性）を持って授業を公開するよう心掛けている。

①海のいのち (H29. 6年生)

この実践では「一人読み」と「パフォーマンス課題」をテーマに実践を行った。「一人読み」とは、レトリックや指示語、またそれらの言葉から想起されるイメージに着目して、まずは自分なりの読みの解釈を持たせる、ということである。その後学級で考えたことについて交流をし、読みを深めた。また、単元の出口に「テレビ番組を作ろう」という課題を設定することで、目的を明確にして物語を読み深めようとした。

②グローブづくりの町三宅町 ～受け継がれる技術～ (H27. 4年生)

この実践では「ねり合いとシンキングツールの活用」をテーマに実践を行った。こ

の実践では、児童の話し合い（＝ねり合い）を活発化するために、シンキングツールの活用を提案した。ボーン図を使って双方の立場の意見を整理したり、数直線を使って自分の立場を明確にさせたりすることでねり合いが活発化し、児童が課題について多角的にとらえ、考えが深まると考えた。



③自然災害から命を守る ～六条校区を大地震から救え！～（R3. 4年生）

これは現在取り組んでいる実践である。この実践では「地域との連携と選択・判断」をテーマに実践を行っている。児童は、地震は命を脅かす脅威であると認識しているが、具体的な知識は少なく、準備も不十分である実情がある。災害から地域を守るために様々な活動をしてくださっている自主防災の方を中心に、様々な方々の力を借りながら、児童に防災についての知識を習得させ、主体的に社会に関わろうとする児童を育成したいと考えている。防災は新学習指導要領から導入された新単元である。この授業も校内で公開し、研修を深められるようにしていきたい。



（3）校内研修の活性化

授業公開やその後の検討会では、多くの若い先生方が参加する姿が見られようになり、校内研修は少しずつ活性化していると考えます。また学年部でも授業や評価についてアイデアを出し合いながら、より質の高い授業ができるよう心掛けています。コロナ禍におけるライブ配信の活用や、リモートでの理科の実験など、新たな取組にもチャレンジをすることができました。以上のような研修の活性化は、一人一人の教員の力量を高めるとともに、この仕事をより深く楽しむための重要なカギになる、と私は考える。

2 成果及び課題

教育現場は大きな変化を迎えている。特にベテラン教員の大量退職によって若い教員の増加が現在も続いており、そういった若い先生方の授業力向上が喫緊の課題となっている。教員自身がすすんで新しいことを学び、失敗を恐れず挑戦する。そして、その学びを周りに積極的に発信し、議論をしながら、互いに学んでいくことが授業力向上につながると思われる。今後も、教員同士が協力して学び合い、力を高め合っていけるような環境を作っていけるよう、努力していきたい。

1 実践内容

I C Tを教育活動に導入することに関心があり、タブレット端末が教育現場に入り始めた頃から効果的な活用方法を探ってきた。そんな中でG I G Aスクール構想による一人一台のP Cが導入されたことにより、一層I C T活用の可能性が広がり、効果的に活用できる場面が増えた。本稿では、本年度担任している第6学年で取り入れているI C T活用について、協同学習・即時性・個別最適化という三つのキーワードをもとに述べる。

(1) 協同学習

これまでは個人もしくは小人数のグループで活動してからクラス全体で共有するという手順を踏まなければならなかった学習活動について、I C Tを活用することでクラス全体で情報を共有しながら進めることができるようになった。

1学期に総合的な学習の時間で行った平和学習のアウトプットとして、地域の展示室を借りて平和に関する展示会を行った。その活動を下級生に報告するための資料作りとして、Google Slideの共同編集機能を活用した。すべてのグループが1つのスライドを編集することができるため、他のグループの作業内容をリアルタイムで確認し、グループ間での提案や調整をその場でしながら発表を作っていくことができた。

他にも、児童が自分の手元にある情報を友達と共有することにより、協同学習がよりやりやすくなった場面が多くあった。自分がノートに書いた算数の解き方のアイデア、インターネットを使って調べた資料、理科の実験の結果、発表原稿の案など、協同学習に不可欠となる情報共有が簡単にできるようになり、ペアやグループで考える時間をしっかりと確保できるようになった。

(2) 即時性

紙のワークシートやノートを活用する場合、児童が書いてから教師が確認するまでの間や、児童それぞれが書いてから他の児童に共有されるまでの間にどうしてもタイムラグが生じてしまうが、I C Tを活用することによりそれがなくなり、時間を有効に活用できるようになった。

国語科「やまなし」の学習では、宮沢賢治の童話作品を読み、その感想を交流するという活動をGoogle Spreadsheetを活用して行った。クラスの児童全員が1つのシートを編集することができるので、一人が書いた童話の感想を、すぐにクラス全員が確認することができる。紙のワークシートに感想を記入してからそれを読み合うという手順に比べ、発表の時間や読み終わるのを待つタイムラグが発生することなく、個人の学習活動と情報共有を常に同時進行で行うことができる。

意見文を書く活動では、その分析にテキストマイニングを活用した。原稿用紙に意見文を書いて提出させる方法の場合、個々の児童の意見を把握するこ

The screenshot shows a Google Spreadsheet interface. The title bar indicates it's a spreadsheet for '2019年度児童発達支援センター 令和 6'. The spreadsheet has columns labeled with numbers 1 through 28, likely representing individual students. The rows contain various entries, some with colored cells (green, red, blue) and some with text. A comment box is visible on the right side of the spreadsheet, containing text in Japanese.

とはできるが、クラス全体として児童がどのような認識をもっているかという傾向を把握するためにはすべての意見文を読み比べる必要があり、かなりの時間がかかる。一方で意見文をPCに打ち込んで提出すれば、テキストマイニングを行うことで、注目されている単語や、理解の傾向が瞬時に視覚的に把握できる。

作文指導をオンラインで行うようにすることで、提出と添削のタイミングを個に応じで行うことができ、時間を有効に使うことができるというメリットもある。夏期休業中には、作文をPCで書き、オンライン（Google Classroom）で提出するという課題を課した。児童は作文が書けたらその場で提出できるので、添削も提出されたものから行うことができた。2学期早々にたくさんの作文を読み、一気に添削するという業務負担を軽減することができた。

（3）個別最適化

ICTを活用することにより、学習の速度に合わせて個別に課題や資料を与えたり、指導を行ったりすることがやりやすくなった。

算数科の授業では、動画による学習を取り入れている。単元のはじめにその単元のすべての授業を動画で配信し、児童はそれをChromebookで視聴することで、自分のペースで学習を進めている。分からないところがあれば繰り返し説明を確認することができ、問題を解く時間も自分のスピードに合わせて調節することができる。児童によって学習の速度が異なるので、宿題についても毎日児童自身で決めている。すべての学習を終えた児童はキュビナ(学習支援ソフト)を活用した復習をするか、グループを組んで難問に挑戦するか選ぶことができる。児童は常に「今、自分は何をすれば理解を深めることができるのか?」ということを考えながら学習に取り組んでいる。



2 成果及び課題

授業や家庭学習においてICTを積極的に取り入れていくことで得られる最も大きな成果は、学習活動を最大限効率化することで、時間をかけたい内容にしっかりと時間をかけることができるということだと考える。

一方、学習活動のICT化を進めていくにあたっての課題もある。まず、児童用Google IDの予備がないことや、端末の予備機が足りないことで教材研究がスムーズに行えないことがあげられる。教員用のIDと児童用のIDではコンテンツの表示が異なるため、配信されたものが児童の画面でどのように見えるのか、授業が始まるまで確認できない。校務用のPCでできることが児童のChromebookではできないということもあるが、これも予備機が十分でないために事前確認ができないということがあった。

自由に使えるモバイルwifiがないことも、活用の幅を狭めている一因である。Chromebookは、オフラインになる校舎外での学習活動では基本的に使えない。さらに活用場面を増やしていくためには、モバイルwifiの配備が不可欠である。

3 その他参考となる事項

小学校 生徒指導の部 (2)

児童が安心・安全に過ごせる学校を目指して

生駒市立あすか野小学校 主幹教諭 武田 昭二

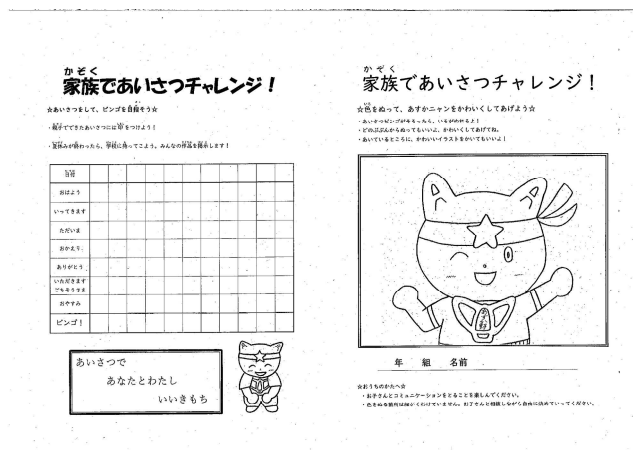
1 実践内容

本校の生徒指導の目標は、「生き生きとした学校生活を送るために、基本的生活習慣を身に付けるとともに、豊かな人間関係を築く」である。その目標の達成のために、「あいさつ・廊下歩行・掃除」の3つの重点課題を設定し、以下の取組を行った。

(1) あいさつに関する取組

本校では、「あいさつは、よりよい人間関係を築く上での基本である」という考えのもと全校体制で指導や呼びかけを行っている。しかし、これまでもクラスごとや生活委員会の活動による「朝のあいさつ運動」を行ってきたが、進んであいさつができる児童は限られ、登下校見守りボランティアや地域の方々へのあいさつが課題だった。そこで、

更なるあいさつの習慣化を目指し、夏季休業中に「親子であいさつチャレンジ」という取組を行った。児童が相手の顔を見て、気持ちの良いあいさつができるようになるための第一歩として、親子で「おはよう」「ただいま」などのあいさつができた日には、学校から配布したプリントのイラストに色を塗ることを呼びかけた。完成したイラストは学校で掲示し、児童の取組への意欲の高まりにつなげた。



(2) 廊下歩行に関する取組

本校は全校児童数が千人近く、廊下を行き来する児童の数も多い。そのため、「廊下を歩く」ことは安全上重要な意味を持つ。しかし、廊下を走る児童に注意をするとその場は走るのを止めるが、教師の姿が見えなくなると走り始めるなど、児童が廊下歩行をする意味を理解し、守ろうとしているとは言えなかった。そこで、教師



から「注意」を受けて児童が廊下を走らないようにするのではなく、生活委員会の児童が中心となり呼びかけや働きかけをすることで、自発的に廊下を歩行しようとする意識が生まれるのではないかと、児童が廊下を走りやすい場所に「かめロード」や「かたつむりロード」を設置した。生活委員会の児童が折り紙で折ったかめとかたつむりを廊下の天井から各ロードの表示と共に吊り下げ、走りそうになっている児童

がそれを目にすることで廊下歩行を意識できることを期待した。この取組は、廊下を走る児童が多くなる休み時間の始まりと終わりに効果が顕著だった。

(3) 掃除に関する取組

学校中をきれいにするために、「集中して掃除をしよう」というめあてを年度当初に生徒指導部で設定した。次に、集中して掃除をするためにはどのようにしたらよいかを生活委員会や各学級で考えていくと、「掃除と関係のないことは話さない」「時間を守る」という意見が出た。学校での掃除はほぼ毎日行われるため、慣れにより気持ちに緩みが生じがちである。限られた時間の中で、自分の仕事に責任を持ち、担当した場所がきれいになるまでしっかりとやり遂げるために、児童と教師が共に考えながら取組を進めた。

以上、3つの重点課題の達成に向けた取組を行うにあたり、月ごとに学校で設定している「生活のめあて」をより効果的に活用できないかと考えた。これまでは、教師から児童にめあてを与え、それを守らせようとするだけの一方通行の指導が多かったが、「生徒指導の三機能」を生かした指導に切り替えた。児童自らこれまでの自分の行動を振り返り、自分なりのめあてが考えられるよう、自己決定の場を設けるようにした。また、児童一人一人がめあてカードを作成し、それを教室や廊下に掲示した。一人一人の課題が視覚化され、頑張っていること、頑張ろうとしていることがわかりやすくなることで、児童一人一人が存在感を持ち、児童同士がお互いの頑張りを認め合う共感的な人間関係が育まれる環境が生まれた。

2 成果及び課題

本校では、学習に落ち着いて積極的に取り組む児童、休み時間に友だちと運動場で元気に遊ぶ児童や、委員会や係の仕事に意欲的に取り組む高学年児童の姿が見受けられている。これは、これまで本校が取り組んできた学習や生活に関わる指導の成果であり、児童の努力の結果であると考えられる。また、昨年度の本校の学校評価アンケートでは、「みんなから大切にされ、安心して学校生活を送ることができている」という項目に対して、「そう思う」「だいたいそう思う」と答えた児童が86%いた。

これからも、「生き生きとした学校生活を送るために、基本的な生活習慣を身につけるとともに、豊かな人間関係を築く」という目標の達成のために、めあてを与えて、それを守らせる「行為の指導」ではなく、児童が主体的・対話的にコミュニケーションを図りながら課題に取り組めるような活動を、全校体制で取り組んでいきたい。

中学校 学習指導の部 (①)

生徒の基礎的な学力向上を目指した教員の授業改善に向けて

上牧町立上牧中学校 教諭 江本 美帆

1 実践内容

本校生徒は、明るく前向きで、何事にも積極的に取り組むことができる。しかし、基礎的な学力の向上へとなかなか結びつかずにいる。生徒の基礎的な学力向上を目指し、教員の授業改善に向けて、研究主任として研修の実施や本校の課題を見つけるために、下記の取組を行った。

(1) 特別支援教育の充実と道徳教育の向上

学級担任をしている際、通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある生徒への「合理的配慮」の必要性を強く感じたことがあった。そこで、特別支援教育のコーディネーターとともに、平成28年度に兵庫県教育委員会が作成した合理的配慮に関する事例を参考に、上牧中学校における合理的配慮の提供のためのプロセスを作成した。これにより、合理的配慮を必要とする生徒を全教職員が把握し、具体的な支援のあり方を話し合うきっかけとなった。

また、これまで行ってきた人権教育を大切にしつつ、教科化された道徳の授業の充実を図るため、その重要性について研修してきたことを全教職員で共有し、様々な教員がローテーションをして、道徳の授業の実践を積み重ねる仕組みを整えた。その結果、生徒が自分の言葉で考えを述べる機会が多くなり、他者の意見に耳を傾け、自分自身を振り返るようになった。人間としての生き方に目を向け、人間の強さ、気高さ、優しさだけでなく、弱さ、矛盾等についても気づかせ、考えるように指導を続けた。そのことにより、自分の意見だけでなく、周りの意見も尊重する生徒が多くなったと感じている。

(2) 教員の授業力向上に向けた取組

上記(1)のような実情や教職員の研修へのアンケートを実施した結果から、特別支援教育・道徳教育の研修を求める声も多く、外部講師を招聘し講演していただくことにより、教職員全体のスキルアップを目指した。また、GIGAスクール構想の実現に向けて、ICTの活用に関しての実践的な研修にも取り組んだ。研修を受けた教職員からは前向きな意見が多く、研修を重ねていく意義はあると実感した。しかし、このような研修をしていくことが、本校の課題を解決していくことにつながるのだろうかとも感じた。本校生徒の課題として、基礎的な学力の向上が挙げられる。そのためには、教員の授業を改善する効果的な方法が必要であると考えた。そこでまず、教員がお互いの授業をいつでも見に行くことができる授業見学月間「授業のキャッチボール」を設定し、その後、実施状況のアンケートを行った。結果として、授業見学月間については、見に行く回

授業のキャッチボール (6月) の実施状況

授業見学の状況についてお聞きします!

このフォームでは 兵庫県教育委員会 ユーザーのメールアドレスが自動的に収集されます。設定を変更

キャッチボールカードは何枚使いましたか?

0枚

1枚

2枚

3枚

4枚以上

Google Forms を利用した
授業見学アンケート

キャッチボール

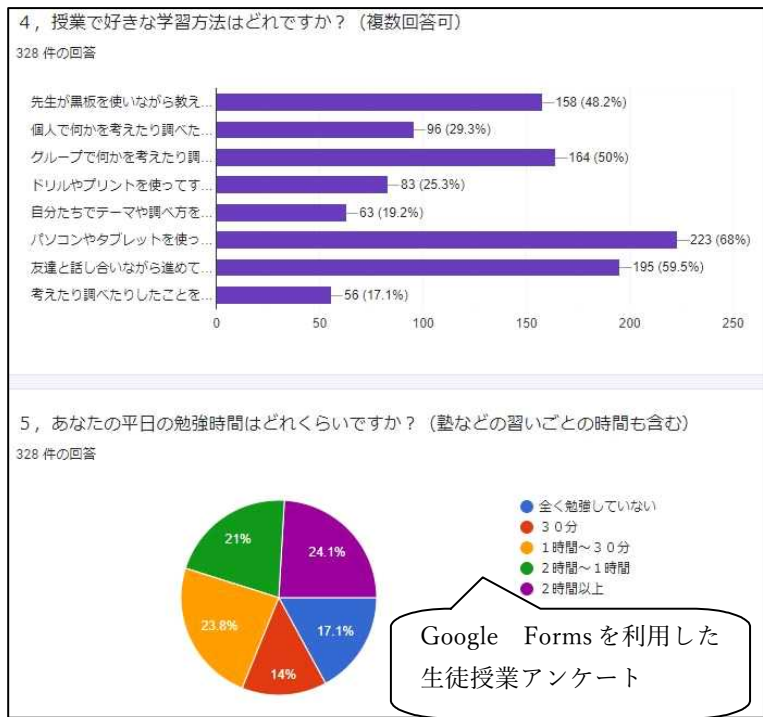
0枚

1枚

2枚

3枚

数の少なかつた教員も少なからずいたこと、授業見学への抵抗感があること等が分かつた。このことから、回数の少なかつた教員へのアプローチの仕方を工夫することや、いつでも見に行くことができる学校の雰囲気・教員間の関係性に課題があることが明確となつた。そして、具体的な課題を把握するため、生徒にも授業に関するアンケートを行った。これにより、他教科に比べて数学と英語が苦手であることや、グループ活動やパソコンやタブレットの活用が好きであること、家庭学習の時間が短いこと等が分かつた。こうした結果から、各教科の課題とするのではなく、教科をこえて学校の課題として苦手教科へのアプローチの仕方を考えることや、パソコンやタブレットを用いた授業展開、家庭学習への工夫等、学校の課題を解決していくための具体的な方向性が見えてきた。



2 成果及び課題

学校の実情に合った研修等を行うことで問題意識が高まり、授業のスキルアップや学校全体の一体感につながるため、研修を継続的に行うことは重要である。そして、授業見学をすることによって新たな気づきや他学年の生徒の様子を知ることができるので、授業見学に対しての良い動機付けとして行っていきたい。また、アンケートをとることにより具体的な課題が明らかになったことから、今後は経年変化を見ていくことでより効果的な方法が見つかると思う。一方、アンケートの取り扱いや今後の取組については、特定の教科が問われることもあるため慎重に進める必要があることが分かつた。生徒の基礎的な学力の向上を目指すには、一人の教員が成し遂げることは難しく、学校の教員同士のチームワークが欠かせない。課題を個々のものとせず、学校全体で取り組みながら研究主任がそれを発信しつづけることの重要性を感じた。これからは、教員同士のチームワークを高める工夫をしながら、生徒の基礎的な学力の向上という課題を解決するために、教員の授業改善に向けた効果的な取組を模索し、実践していきたい。そして、本校の学力向上のモデルとなる“上牧スタイル”のようなものを構築できるようにしていくことが今後の目標である。

3 その他参考となる事項

兵庫県教育委員会 特別支援教育課 「学校で「合理的配慮」が必要になります」(H28)
独立行政法人教職員支援機構「発達の段階に応じた道徳科の指導」校内研修シリーズ No67
ベネッセ総合教育研究所 「第5回学習基本調査」報告書 [2015]

中学校 学習指導の部 (①)

全教員で取り組む道德教育の推進について

吉野町立吉野中学校 教諭 車谷泰典

1 実践内容

私は吉野町立吉野中学校に赴任して3年目、現在奈良県道德教育研究協議会の事務局長として奈良県の道德教育に携わっている。協議会で学んできた他校の授業実践を校内研修で広め、道德教育の推進を図ってきた。そこで、私が今まで取り組んだ3点を述べる。

(1) 問い返しの発問について

道德の授業において、問い返しの発問を行うようにしている。例えば、生徒が発言した内容について、どのように考えたのかをさらに深く考えることができるような発問、「なぜ。」「もう少し詳しく教えてくれる。」等と問い返しを行っている。問い返しは個人に返すだけでなく、クラス全体にも返し、教員と生徒、生徒と生徒の会話につながるように心掛けている。また、座席をコの字型にしたり、ペアやグループ、ICT機器を活用したりして生徒が発言しやすいように授業の環境づくりに工夫した。



(2) 個人内評価について

道德の授業の評価において、生徒の考えや気持ちを基に、一人一人の成長を受け止め、認め励ます個人内評価を目指した授業実践をしている。評価のものさし(①教材を通して、自分のこととして考えているか。②教材に出会って新しい気付きがあるか。③友だちの考えを聞いて新しい気付きがあるか。)に照らして、生徒が活動できる授業設定をすることに努めた。生徒が自分の考えをノートに書いたり、周囲の子と話をしたり、グループや全体での発表をしたりする時間をできるだけ多くとり、自分の考えを深め広げることができるような授業を行った。授業で工夫したことは、生徒が発言した内容について、要点を板書し、「なるほど。」「すごく考えているね。」等と言葉かけをするように心掛けたことである。また、私は、授業後に生徒が振り返りで道德ノートに記述した内容を受け止め、共感するようなコメントを記述することになっている。

(3) 学校組織として

本校では、全教員で取り組む、学年で授業者が入れ替わるローテーション授業を実践している。特に今年度からは、所属学年の枠を越えたローテーション授業に取り組んでいる。併せて、ティーム・ティーチングの指導形態をとっている。そのため、担任は普段の道德の授業では気付かなかった生徒の様子を知ることができるようになった。生徒の発言をメモをして評価したり、多様な指導方法を学んだりする機会が以前より増えた

という意見が多くなった。生徒は担任以外の教員の道徳の授業を受けることができるため、多様な考え方や価値観に触れることができるようになった。また、この取組は教員にとって、普段授業を受け持っていないくて関わりの少なかった生徒を知ることができ、生徒との距離感を縮めることにもつながっており、多くの利点がでてきている。



2 成果及び課題

実践後の成果として、今まで道徳の授業にあまり関心がなかった教員が、この取組を通して道徳の授業の大切さを理解し、多くの場面で教員同士が教材について話し合う場面が多く見受けられるようになった。授業では問い返しの発問が増えてきたため、生徒の振り返りノートには、「道徳の授業を通して知らないことに気付いたり、友だちの意見を聞いて共感したりできることが多いので、授業が楽しくなってきた。」と書いている生徒が増えてきた。また、生徒の活動を教員がきっちり観察し、通知表に記述することで、「先生は、私のことを理解してくれているんだ。」という気持ちにさせ、教員と生徒の信頼関係がより一層深まったことが大きな成果と考えている。

課題としては、生徒の学習が、まだまだ主体的・対話的で深い学びに至っていないところである。なぜなら、発問を通して、生徒の考えが教室中に飛び交うといった、生徒主体の道徳の授業実践が行えていないからである。このことを克服するには、全教員で道徳の教材分析を行うこと、校内研修の充実を図ること等、指導力向上を目指す必要がある。そのためにも、私は率先して研鑽に励み、他校の授業実践を校内研修で広め、道徳の授業を軸に全教員で取り組む道徳教育の推進を図っていく所存である。

1 実践内容

本校は、令和3年度末に閉校をむかえるが、最終学年となる生徒の学力向上に向けて、全職員が授業改善に取り組んでいる。コロナ禍における学習保障の問題、ICTを活用した教育環境の整備等が進むなか、周りの先生方に助けをいただきながら、昨年度から教務主任として、取り組んできたことについて報告する。

(1) G Suite for Education の導入にあたって

県域での導入にあたって、誰もが初めてのことであったため、まず、各教科や分掌から選出されたICT活用委員でGSfEの利用方法について、研修を行った。ICTに詳しい先生だけが利用するのではなく、全ての先生が、効果的に活用できるよう全体研修を行った。

コロナ禍における学校内の離れた場所でのリモート接続、それぞれの生徒のPCでのスプレッドシートへの意見等の書き込みや共同作業、Google Classroomの活用方法、Google formを利用した各種アンケートの集計など様々な場面でICTを手段として活用してきた。

(2) ICTを活用した教員の授業改善の推進について

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、オンライン学習の準備を進めることになった。その際、多くの教員がICTを身近なものと感じられるように、「使いやすさ」を重点に位置づけ、機器設置および職員研修を行った。

オンライン授業を実施するにあたって、パワーポイントなどのアプリケーションを利用した授業、手元の資料に書き込みする書画カメラを使用する授業、黒板を撮影する授業を想定し、機器の接続が誰でもできるようICT活用委員とともに検討を行った。

オンラインの模擬授業を行ったり、受講したりできる設備を整えたICT研修教室を設け、授業空き時間等を活用し、教科等でオンライン授業のための事前研修を実施した。

その後、プロジェクターや書画カメラ等のICT機器を全HR教室に設置し、どの授業でも活用できるようにした。そのことによって、授業が効率化された。また、生徒の発表時の機器利用が進み、生徒の表現力の向上につながった。さらに、感染予防のために空き教室をフル活用し、1学級を複数教室に分散し、各教室をGoogle Meetで接続できる環境を整えた。このことは、分散登校実施期間における家庭でのオンライン接続が困難な生徒対応に活用できた。



(3) 電子黒板の活用について

本校では、今後の導入が予想される、電子黒板を各社よりお借りし、教員のICT活用能力向上に努めてきた。各教科・各自での研修を重ね、全ての教員が電子黒板が必要な場面で、効果的に活用できるよう、電子黒板を活用した授業展開事例を情報共有している。



(4) 主体的な学習習慣の確立に向けて

本校の重点目標の一つとして、生徒の「主体的な学習習慣の確立」を掲げ、「生徒が主体的に取り組む授業の改善や家庭での学習時間の確保」を具体的目標としている。

本校は、観点別学習評価を早期に導入しており、生徒にその達成度をフィードバックすることにより学習のPDCAサイクルの確立を目指した。また、家庭学習点検週間を設定し、一週間の事前学習計画、実施結果、振り返り、自習への目標および計画立てをし、次の学びへ繋げるようにした。

(5) 校務支援システムに関する各教員へのサポート態勢について

令和元年度より県立学校の校務支援システムが統一され、このシステムを活用した評定の算出等が実施されることとなったが、指導と評価の一体化をより意識した授業改善に向けて教務・文図部が中心となり、各教員をサポートする態勢を築き上げたことから、各教員の成績集計等の合理化はさらに進み、生徒の学習到達度のフィードバックだけでなく、教員の働き方改革に結びつくものとなった。

2 成果及び課題

ICT機器の活用は、コロナ禍において教員や生徒にとって身近なものとなった。生徒は自らの学力向上を図ったり、授業で学んだことを振り返り定着を図ったりするなど、新たな学習方法として情報機器を活用した。また、欠席生徒・不登校傾向にある生徒の学習保障にも活用した。さらにICT機器の活用は進み、文化祭や卒業式では感染予防対策のための分散会場とオンラインで双方向通信する取組へも発展している。

次年度に予定されているBYODやICT機器のさらなる整備に向け、今年中に教員研修を進めるなど、評価や授業の改善の視点からの取組がさらに必要であると考えている。

3 その他参考となる事項

奈良県立平城高等学校HP

1 実践内容

本校は全校生徒が100人にも満たない小規模校で、そのうちの60%以上の生徒が寮生活を送っている。生徒の中には、過去に非行歴があったり不登校であったりした生徒が少なからずいる。また、複雑な家族構成や周囲の大人からの愛情不足により、自分をうまく表現できない生徒もいる。一方、幼い頃から自治体の支援が手厚い中で育ってきたことから、苦勞することを避け、競争心や向上心に欠ける者もいる。このような生徒達が高校生活を有意義に送り、自ら成長したことを実感できるようにするため、自己有用感を高めるとともに組織の一員であることを自覚させるような生徒指導を心掛け、一人でも多くの生徒が十津川高校に入学してよかったと思い、十津川高校生であることに誇りをもってほしいと願って生徒と向き合ってきた。ここに生徒指導部長に就任してから7年間で実践してきた生徒指導の一部を報告する。

(1) 家族のような関係づくり

すべての生徒の出身中学や家族構成を入学するまでに把握するところから始まり、あらゆる機会を通して生徒と会話を重ね、生育歴や性格、趣味などの情報を得ようと努めている。また、生徒との距離をできるだけ縮め、生徒が話しかけやすい状況をつくっている。親元を離れて寮生活をしている生徒はもちろん、本校のすべての生徒の保護者代わりとなり、時に厳しく、時に優しく生徒と関わっている。

保護者にも各家庭での指導方針や生徒の家庭での様子などを積極的に聞くと同時に、生徒が頑張っていることや成長していることなどを保護者に話すことで連携を密にし、相互の信頼関係を高めるようにしている。

(2) 規範意識の向上

高校在学中だけでなく高校卒業後も有意義な生活を送ることができるよう、基本的な生活習慣を確立させることやあらゆる場面で自らを律することができるようになることを重視して指導をしている。

数年前までは喫煙や窃盗などの非行に走る生徒もおり、社会規範を理解させることに時間を割くことも多かった。近年は非行に走る生徒はほとんどいなくなったが、高校入学までに不登校を経験している生徒が増加傾向にあり、昼夜が逆転した生活を送っていたり望ましい食生活を送っていなかったりするなど、基本的な生活習慣が確立できていない生徒もいる。そのような生徒は寮生活を送っている生徒に多く、「起床時間に起きて遅刻しないで登校する」、「寮で提供される食事は残さず食べる」といった、本来家庭が担うべき指導も行っている。



入寮オリエンテーション

また、学校に誇りをもち、TPOに応じた態度を取ることができるよう、儀式的行事を実施する際はその意義を生徒に理解させてから式典に臨むよう意識付けをしている。



高齢者施設清掃活動

(3) 自己有用感の向上

社会性を身に付けさせるため、生徒会活動や部活動、ボランティア活動に積極的に参加するよう働きかけている。その際、高校に入学するまで社会活動に参画した経験がほとんどない生徒や成功体験が少ない生徒がいることから、失敗をしても責めることなく、挑戦することを称えとともに、仲間と協力し、苦労を重ねながら事を成し遂げることの大切さを理解させるようにしている。また、登校する小学生の見守り活動、高齢者施設や保育所への訪問などを通して、自宅から通学している生徒だけでなく、寮生活を送っている生徒も地域社会の一員であることを自覚させるようにしている。

2 成果及び課題

すべての先生方と協力して生徒を見守り、粘り強く指導をしてきた結果、生徒会活動や部活動に積極的に参加して他の生徒の模範となるようになった生徒、ボランティア活動を通して人の役に立つことに喜びを覚えるようになった生徒、中学時代は不登校だったが高校では自分の居場所を見つけて休むことなく登校できるようになった生徒も多くいる。大きな声であいさつをしたり校歌を歌ったりする生徒も非常に多く、入学時とは比較にならないくらい自信に満ちあふれた姿で卒業していく生徒が大半である。また、地域でのボランティア活動を積極的に行った結果、地域の方々からも生徒達は好意的に受け入れられている。

今後、親元を離れて寮生活を送りながらも、様々な特性に対する配慮を必要とする生徒が増加すると予想される。そのような生徒に対し、よりきめ細かな指導を心掛け、基本的な生活習慣を確立させ、集団生活を円滑に送ることができるようにしなければならない。そのため、保護者や生徒の出身中学、関係諸機関等とより一層密接に連携する必要がある。もちろん、自宅から通学している生徒も含め、すべての生徒が有意義な高校生活を送ることができるよう、自己有用感を高めることができる活動を少しずつ増やしていきたい。

社会が急速に変化していく中、高校在学中だけでなく高校卒業後も自らを律し、社会の一員として自分がすべきことを自ら考え、行動できるような生徒を一人でも多く育てていきたい。また、本校の生徒が元気で笑顔溢れる高校生活を送ることで、過疎化や高齢化が進む十津川村に少しでも希望と明るさをもたらすことができればと願っている。

小学校 学校保健の部 (③)

一人ひとりを大切にされた保健教育の取組について

天理市立福住小学校 養護教諭 車井 佳奈

1 概要

本校は、全校児童62名の小規模校であり、恵まれた自然環境と個に応じたきめ細かな指導を特色とした学校である。平成29年度より天理市全域から就学可能な小規模特認校に指定され、今年度からは9年間の連続したカリキュラムによる施設一体型の小中一貫校となり、『一人ひとりが 元気で いきいきと輝く子ども』の育成を目指し、様々な教育活動を行っている。

養護教諭として初任で配置されて以来、児童・保護者・教職員に開かれた保健室経営を目指し、保健教育や教育相談の充実、不登校等支援の推進に取り組んできた。また、学校医・学校歯科医・学校薬剤師や地域の方々など、児童に関わる様々な人とのコミュニケーションを大事にしながら、児童を真ん中にした教育活動を進めてきた。

2 実践内容

(1) 様々なツールを活用した「心のつぶやきキャッチ」

保健室でみられる「自分の思いを言葉で表現することが苦手で、心の中に閉じ込めている」児童の実態から、平成29年度より天理市・山辺郡養護教育研究会（幼稚園・小学校班）において、「心の健康」へ着目した取組を進めている。

本校では、着任前より毎月8のつく日に「はははしらべ」と称し、全校児童を対象に生活調べを実施している。基本的な生活習慣を尋ねる項目に加えて、現在は「気分や気持ち」「直近の学校行事などへの思い」を尋ねる項目などを設け、自分の心の様子についても振り返られるよう工夫している。低学年では、今の自分はどんな気持ちかを考えさせ、選択肢から選べるようにしている。高学年では、実態をより個別に把握するためにGoogle formを活用している。さらに、月末には家庭や養護教諭からの応援メッセージを書いて伝えることで、児童の励みとなっている。

また、学級担任と連携し、保健教育の取組としてストレスチェックを実施し、ストレスマネジメントやレジリエンスに関する啓発を行っている。

11/18はははしらべ

元気に運動や勉強をするには、いつもの生活リズムをとることが大切です。自分の健康を自分で守るために、生活習慣を振り返りましょう。11月は8日(月)と19日(木)と24日(金)の3回実施します。

①今の気分を色でたとえると何色？(それはどうして？) *

回答を入力

②今日の体調、今の気持ち、相談したいこと…先生に伝えたいことがあれば書いてください。

高学年「はははしらべ」



(2) コロナ禍の不安に負けない感染症予防の呼びかけ

健康委員会の児童に呼びかけ、感染症予防動画『全集中！』（正しい手洗いやマスクの着用方法、朝の健康観察の重要性についての啓発動画）を作成し、各学級へ配信した。

そして、昨年度の臨時休業期間においては、担任を通じて保健だよりや生活調べを発信し、Meetによる朝の会において活用した。

また、児童のコロナ禍における様々な不安感を和らげたいと考え、生活リズムを整

えることや感染症予防、リラックス法についての保健指導動画を教職員で作成し、学校ホームページを通じて配信した。

3 成果及び課題

(1) 保健室だけにとどまらず、はははしらべや保健教育を通じたコミュニケーションも大事にすることで、児童・保護者や教職員とのつながりが深まった。一人一人の児童の実態をあらゆる角度から把握することで、個に応じたサポートの在り方が明確となった。どんな場面においても児童に寄り添うことで、心の安定を図り、児童の自立を促すよう努めた。

児童一人一人の心と向き合いながら行う保健教育は容易なことではないが、様々な現代的健康課題を抱える児童たちにとって重要な視点であると考えます。そのため、高学年のはははしらべにおいては、Google formを活用することで現代の児童に多く見られる「話すよりも書く(打つ)ことにより心のつぶやきを表現しやすい」ことが顕著となり、保健室での相談活動へとつなげることができた。

保健教育におけるストレスチェックなどの取組では、自分の心の成長や健康と向き合うことを促し、ストレスとうまくつき合う方法を啓発することができた。

今後は、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、医療従事者などの専門機関の方々と児童を結ぶ架け橋的な存在となり、連携した取組を進めていきたいと考えています。

(2) 「感染症を正しく知り、正しく予防する」ことの大切さについて、委員会児童や教職員と作成したユニークで効果的な動画を通じて、全校のコロナ禍における様々な不安感を和らげることができた。

特に、臨時休業期間中に教職員が心を込めて作成した保健指導動画を配信したことは、児童の不安感を和らげる上で効果的であった。「学校へ登校していなくても、先生方や多くの方がみんなの健康を願い、見守っているよ」という教職員のあたたかい思いを発信することで、「先生、動画みたら、元気でたよ。」「前にも深呼吸の話をしてくれてたよな。」等の児童からの反応がみられ、ねらいは達成できたと感じた。

今後もこれらの取組を継続するとともに、様々な状況下にある児童の心のケアについてもアンテナを張っていきたい。

4 その他参考となる事項

●令和3年度 奈良県養護教育研究会研究発表(予定)

『自分の思いに気づき、ストレスなどへ望ましい対処ができる児童の育成を目指して』

天理市・山辺郡 養護教育研究会 幼稚園・小学校班

高等学校 特別活動の部 (④)

「書店クラブ」が目指すもの

～「学校は地域を良くする力になるか、それは生徒を成長させるか」に挑戦する～

奈良県立橿原高等学校 教諭 藤井謙太郎

1 実践内容

(1) 概要

令和2年1月、日経新聞の記事「書店は社会を良くする場になるか」に触発された校長から、「学校は地域を良くする力になるか。それは生徒を成長させるか。」の命題を与えられた。地元の書店を部室とする「書店クラブ」のアイデアを立て、挑戦することを決めた。即座に設置検討プロジェクトチームのリーダーとなり、株式会社三洋堂書店橿原神宮店の協力の下、令和2年4月に書店に関わる人たちと交流しながら活動を行う部局を立ち上げ、主顧問を務めている。

(2) 経緯

発足時は書店で時間を過ごすことを活動の基盤にしようと考えていたが、新型コロナウイルス感染症対策のため長時間店舗で活動することができなくなった。そこで、コロナ禍でも可能な活動を店舗スタッフや生徒と共に考え直した。書店は地域社会において知識や情報、考えを得られる場所であり、またそれらを求めに地域の方々が集う場所でもある。このような「知的空間」を活動場所とし、幅広い学びが得られる活動を思案した。

(3) 活動例

①地域の方から学ぶ

店舗で「高校生にオススメの本」というアンケートを実施した。部員が不在でも来店者は回答できる。部員に読んでほしい本、勧める理由、年代等を記入していただき、半年間で150枚以上の回答が得られた。読んでほしい本には、小説、新書、参考書など様々なジャンルの本があった。特に高校生と年代が離れた方々が勧める本には、部員がこれまで触れることのなかったものが多くあり、新たな考えや感覚を得ることができた。回答には「今後の人生のために」や「若いとき、仕事をするときに読んでほしい」等のコメントが見られ、部員の成長を応援する地域の方々の思いが伝わる。また、勧められた本を読み、部員たちは感想を店舗内に掲示した。対面ではないがつながりをもつことができたと考える。

②地域の人々に発信する

売り場で生徒が自作のポップで本を紹介している。毎月テーマを設定し、部員がそれぞれ書籍を選ぶ。書籍の良さや内容、紹介理由、どんな人に読んでもらいたいかなどを表現する。部員はどうすれば目にとまり、購入につながるかを考える。書店員の



方の話では部員が制作したポップに注目する来客者は多く、高校生がどのような本を読むか、どのように表現するかを楽しみにしているとのことであった。

③地域の人々を振り向かせ、つながりを深める

書店での活動をもとに、より広く地域とつながるため、地域誌の編集社や地域の広報誌と連携した。部員が取材に同行し、記事を書いた。広報誌には毎月、部員作成のポップと紹介文を載せ続けている。また、高校生対象のプレゼン大会にも出場し、これまでの活動や課題などを他の高校生と話し合った。活動内容を他者に伝えることで課題や今後の展望について考え直すことができた。



2 成果及び課題

部員が最も成長した点はコミュニケーション力の向上である。各部員の表現力が向上し、校外の様々な年代や職業の方と関わる中で、自分の考えを的確に伝える力が伸びている。他者に考えを発信することへの抵抗がなくなり、伝えることの楽しさに気付くと同時にその難しさ、奥深さにも触れることができた。学校での授業における発表の様子も格段に変わり、新聞やテレビの取材にも対応できる力が付いた。

また、私自身も部活動の可能性への認識が変わった。これまでは大会で結果を残すことが目標であったが、大会のない「書店クラブ」においては、「生徒の成長」という目的を意識して活動を考えることができた。生徒に付けさせたい力を意識することで、活動の目的が明確になり、生徒への指導もスムーズに行うことができたと感じる。その過程で広い視野をもつことも経験し、部活動の意義について深く考えるきっかけとなった。

加えて、地域と学校の連携に貢献できたのではと考える。部員は地域の方に見ていただいているという感覚をもちながら活動しており、また地域の方も「書店クラブ」を通し高校生を意識する機会が増えたと感じる。

今後は地域の方とより強いつながりをもって活動することが課題である。コロナ禍において実施できなかった活動もあり、この活動が継続的に発展していく仕組みを考えることが必要である。

3 その他参考となる事項

榎原高校HP 書店クラブのページ

<http://www.e-net.nara.jp/hs/kashihara/index.cfm/7,1136,34,148,html>

榎原高等学校書店クラブのツイッターアカウント

@syotenclub